

# 星 書 亂 抽

## 野 尻 抱 影

私のやうに英文學畑から出て、天文學の旁徑をこつこつ歩いてゐる人間の書架には、専門諸家から見では雜駁な本ばかり集まつてゐる。自分も時にこれらを見渡してはだゝ廣く打つた網がいつの日になつて手もとに引き寄せられるかと訝しんでゐる。

まづ、西洋で私のやうな研究をやつてゐる人達——さう多數とも思はれないが——が、その著書の序文で敬意を表することを忘れない本は、R. H. アレンの、Star-Names and Their Meanings である。歐洲古今の星名、それと近東其他に互る物をも實に根氣よく博搜してゐる。前世紀末年の出版でもう絶版だらうと想はれるが、以前は日本でも一部の専門家には讀まれた本と見えて、某大學の圖書室の棚に埃を被つてゐるのを見たこともあるし、國際的天文觀測家の射場保昭君も天文臺の某老博士から贈られたのを愛藏してゐる。私も、此の十數年これほど首引きした星の本は無い。これを索引に使つて、いろいろの本に就き古今の星名とその由來や説話を執ねく漁つてゐるのである。

ギリシヤやローマ古典時代の星は、ギリシヤ語學者水野清太郎君と毎日顔を合せてゐる便宜もあつて、主として Loeb Library に據つて學んでゐる。特にギリシヤ詩の中でも、アラトスの天文詩「ファイノメナ」は此の向きでは貴重な文獻で、キケロもこれを翻譯し、ローマ時代の貴婦人たちは、それにより競つて星座の意匠を豪華な壁掛タペストリーに刺繡したと傳へられる。——澁谷の東横映畫劇場の緞帳に十二宮の一部を刺繡したものがあつたが、私は毎度此の事を聯想してゐる。

ラテン詩人では、ヴィルギリウスの農事詩「ゲオルギクス」、オヴィディウスの「ファステイ」などにいろいろの發見があつた。「ファステイ」の4月の或る日、犬星シリウスに赤犬の犠牲を捧げて穀物に黒んぼのつかぬやうに祈るロビガリヤ祭で、詩人と祭司とが立ち話をするくだりなどを讀むと、今も強烈に煌いてゐる此の星の光が見上げられるし、又、當時はかういふ信仰が根強く支配してゐた

ので、これを單にロマンスの眼で見てもならない事などを考へさせられる。

ダンテ『神曲』の星は、ミルトン『失樂園』の星と比べることによつて一層意義がある。英文學では、英詩の曉星と讃へられたチヨイサ<sup>1</sup>の Canterbury Tales 他いろいろの作に占星術アストロロジに関する詩句や挿話が多い。それからミルトンは勿論、シェイクスピア、キーツ、シェリ<sup>1</sup>、テニスン等にも星が點ぜられてゐる。特にテニスンは晩年まで小望遠鏡で星を覗いてゐただけに天文詩人として第一位を占むべきだらう。以上に就いて私は嘗て小研究を發表したことがある。

星座の起源は言ふまでもなく、アッシリヤ、バビロニヤに求めなければならない。これらの國々の天文文獻はワイドナ<sup>1</sup>、クグラ<sup>1</sup>、エレミアスなどの著書に盛られてゐる。一昨年だつたか、イラク發掘隊長フランクフォ<sup>1</sup>ト教授は、テル・アグラブ出土の壺の破片に發見した瘤牛ビブの彫刻を、此の種の牛が印度でなければ棲息しない理由から、印度・スメリヤ文化の古代に於ける交渉を立證する最初の資料であるとして發表してゐた。しかし、此の牛の彫刻なら、伯林博物館所藏のウルク發掘の天文圖瓦版に金牛宮(牡牛座)の姿として刻まれて居り、私は前記エレミアス氏 Handbuch der altorientalischen Geisteskultur の圖版で十年も前から見てゐるものだつた。

尙ほ私が倫敦の古本屋を通じて手に入れた R. C. トムソンの The Reports of the Magicians and Astrologers of Nineveh and Babylon は、古代アッシリヤ、バビロニヤの諸市に派遣されてゐた占星家たちが、その觀察した天象を占つて瓦版に刻み、早馬で國都に送つた報告二百七十七項を含んでゐる。二巻の中一巻は全然楔形文字で埋められ、他の一巻は其の讀方が大部分で、私に理解出来るのは殘る英語の部分だけであるが、それでも、天文學者たちが常に輕蔑する占星家の祖先がいかに精細な天象觀察を行つてゐたかに驚かされる。

埃及の星に就いては、佛蘭西の學者たちに優れた研究があるが、英書ではノ<sup>1</sup>マン・ロッキヤ<sup>1</sup>の The Dawn of Astronomy が最も知られてゐるだらう。これも絶版で、私は前の本と同じく古本屋から入手した。ロッキヤ<sup>1</sup>は、埃及古代の神殿の多くが、顯著な星の出入の方角に向けて建てられてゐたとする。謂ゆ

る Orientation の説を主張した。例へば、ナイルの増水を前觸れするシウリスが、夏至の頃、初めて暁天に昇る時、その第一光がデンデラ<sup>パイロン</sup>1神殿の塔門と列柱の間を飛んで、奥殿のインス女神の眼に達すると言ふ説明の如きは、私を恍惚とならしめた。しかし、今では此の説はあまり勢力はないらしい。いつぞや、柳田國男氏は沖繩の星に就いて、海に出入する星に對し社を建てた事が考へられるといふ様な話を書いて居られたが、私はその時も此のロッキヤ1の話を想起してゐた。記憶違ひであつたらお詫び申上げる。

それからブレストッドの著書の如き、本國で品切れの報を受けてから、ふと神田で發見したこともある。

次にアラビヤの星は、アレンにも多少出てゐるが、私は、チーズマンとか、埃及の大官ハッサネイン・ベイ氏の紀行その他から拾ひ出したものが多い。又、これに就いては懺悔話がある。七八年前のこと、丸善にベドウ、<sup>イン</sup>土人の研究書が來てゐた。その頃で二十圓位の本だつたが、その數頁に互り星のアラビヤ名が、それに關する土人の生活と共に相當詳しく出てゐた。例へば、北極星をアル・ゲディと呼んで、長老たちはキャンプの夜々若者らに、オプトン・アルゲディ（北極星に氣をつけよ）と教へるとか、南へ下る時には、「スハイル（支那名、南極老人星）を正面に、アル・ゲディを馬の臀の上に」といふのを合言葉にするとか言ふ類の知識で、いろいろの星にたよる沙漠の旅物語が私をその書架の前に釘づけにしてしまった。

と言つて、その數頁の爲めにその本を買ふだけの決心もつかなかつたので、私は久し振りで受験生になつたつもりで、一心にアラビヤ語の英語綴りを暗記にかかつた。そして詰めこめるだけ詰めこむと、食堂へ入りこんで、その前に買つて持つてゐた小説の見返しに鉛筆でせつせと書き入れて、また書架の前に戻つて行きこれをやつた。そして、數回繰り返して、漸く大部分を書いてしまつたが、此のアラビヤ語の剽窃にはへとへとになつて歸つた。而も諦め切れずに又出かけて行つたら、その本はもう賣れてしまひ、書名も逸してしまつた。

こんな立讀みを毎々やられては丸善も迷惑だらうが、時には、中米マヤ族の星の穿鑿に深入りして、うかと註文したマヤ協會の限定版 The Maya Glyphs

といふ本など、首づくしの象形文字の羅列で星に關するものはほんの小部分だし、而もドル變動の直後で二百ページに足らぬ本に百何圖かを拂ひ、今も私の書架の隅に眠らせてあるやうな事もあるのである。

太平洋民族の星に就いては、J. C. アンダーセンの *Myths & Legends of the Polynesians* に、ポリネシア土人の中の星名や口碑が比較的豊富に考證されてゐる。その中、ソシエテ諸島に傳はる天地創造の歌は、畫家ゴーンガンが『ノア・ノア』の中に引用してゐるものである。メラネシア土人の星は、コッドリントンの著に多少載せられてゐた。

尚ほ此の地方の星を知るに便宜な邦著に、松岡静雄氏の『太平洋民族誌』及び『南溟の秘密』がある。特に後著には教父エルトランド著『マシヤル島民』に據つたといふ六十有餘の星又は星宿に就き、氏が海軍大佐であられた天文乃至海洋知識を以て親切に説かれてゐる。

例へば私は、此の書でマシヤル土人が北斗七星をワ・エオ・アン・ヂュムール(ヂュムール神の舟)と呼ぶことを知つたが、これは、我が石見地方や大分縣の中津町でいふ北斗の和名の「ふなぼし」と同じ見方であり、更に宮古島で言ふ「フエブシ」、八重山諸島の「ウフナブシ」に通ずることを發見して、雀躍したのである。

印度の星には、英國の學者の研究したものがあるのは當然だが、併せて漢譯又は國譯一切經の中の、摩登迦經、日藏經、諫太子經とか日本でも廣く讀まれた宿曜經などの天文の部分に漁つてゐる。坪内先生は摩登迦經の阿難尊者と梅陀羅の女との戀を脚本にして居られ、幸田露伴博士にもこれに關して書かれたものがあるが、私などには、兩先生がペンを留められた次ぎの天文問答から、より興味の對象になる。

私は又かういふ漢譯佛典に見出す星<sup>ナクシヤトラ</sup>宿の形容などの印度情調を喜ぶ。例へば、牡牛座のヒヤデス星團(和名つりがねぼし)がV字形に並んでゐるのを、形飛雁の如し(摩登迦經)、形立又の如し(日藏經)、形車行の如し(諫太子經)、形車の如し(宿曜經)と喩へてゐる類ひである。私たちになら、かういふ形容の味

も實感出来るが、西洋人にはどうだろうか？ これに限らず西洋の本を読んでゐる間に、所詮東洋のことは東洋人と感じることは稀でない。

支那の星に就いては、古く書經の堯典や詩經以來、星の文獻は極めて豊富であり、本格的の研究には、新城、飯島、上田諸博士の名著がある。私の爲めにも、まづ史記の天官書が挙げられる。それには、國譯漢文大成のものが註に西洋の星名までも對照してあつて親切である。漢書の天文志なども、これと大同小異である。それから我が寺島良安の倭漢三才圖會の天部は、支那書に據り返り點を附けたもので便利である。又故小野清氏の天文要覽は、支那及び廣く東洋の天文を知る上に有難い本で、今でも時に古本屋で見かけることがある。

私は、圖天圖說、欽定儀象考成、譯天、天文大成、大唐開元占經、諸神聖誕日玉匣記、明抄占驗圖總略、天文祥異繪圖集註などといふ本を、こき混ぜて並べてゐる。大佛次郎が嘗て支那からがむしやらに取り寄せてくれたもので、多く清朝の出版である。終りの二書は肉筆本で彩色畫が入つて居り、税關で骨董品に扱はれた。しかし、名の示す通り大半は星占ひに關するものである。

それから私の床の間に一年の大半懸かつてゐる南宋淳祐年中の天文碑柘本の大幅は下谷の古本屋に曝されてゐたのを二圓で買ひ表装したもので、黒々とした地に眞白に抜けてゐる傘大の廿八宿を、時々オペラグラスで見上げては陶然となつてゐる。

最後に日本の星が残つた。

私は星の日本名を文獻や口碑や、友人知己の助けで蒐集し、先頃約四百種を發表した。そして前述のやうに海外の星を食ひ漁つてゐても、究極の目的はやはり祖國の星にある。これに就いては他日また清讀を仰ぐことにしたい。

#### ベルンハイマ博士の訃

オーストリア國ザイン大學教授同大學天文臺助役 Walter E. Bernheimer 博士は長く病床にあつたが、去る12月14日、惜しくも逝去した。享年45歳であつた。

同博士は太陽の熱輻射の研究家であつて、米國アボト博士に對立し、太陽輻射線の強さの變動するといふ説には反對してゐた。